

「救いは恵みのプレゼント」

使徒行伝 15章 1節～21節

説 教 本庄侑子牧師

今日の説教題を「救いは恵みのプレゼント」としました。プレゼントの中身は、イエス・キリストの十字架と復活による罪の赦しと永遠の命の約束です。

最近の説教で、それをこのように言い換えました。イエス様の死と復活によって、人生のどの瞬間も神様と無関係とは言えなくなってしまった命。過去にどんなことがあったとしても、神様が驚くべき御力を働かせて、悪を善に変えていってくださる。これから、何が起ころうとも、その全ては神様の愛と恵みとを映し出すための物語の1ページにして下さる。それが救いであり、プレゼントの中身です。

イエス・キリストを救い主と信じるということは、イエス様に関する知識を事実として承認するというのとは少し違います。イエス様に信頼するということです。自分自身のことも、過去のことも、これからのことも、その全てを、私たちの罪を赦すために十字架につき、復活し、今も生きておられるイエス様にお委ねする。それがイエス・キリストへの信仰です。

今日お読みした聖書箇所はエルサレム会議と呼ばれています。ユダヤ人以外が完全な救いを手にするためには、自分たちが守ってきた割礼も受けなければならない、と主張する人たちがいて、パウロとバルナバは真っ向から対決をしたのです。会議の議題はイエス様の救いについて。イエス様がしてくださったことを信じて、プレゼントを受け取ることだけによって人は救われるのか。それだけでは不十分で、なお何か行うことも必要なのか。

議論の末にペテロが発言をしました。神様ご自身が、ユダヤ人と同じように異邦人にも聖霊を与えてお救いになったことを目にしたからです。ペテロは、彼等に洗礼を授けました。彼等は異邦人のままで、割礼を受けることなく、イエス様の救いに与りました。パウロやバルナバも彼らが見たことを証言し、ヤコブは聖書を引用してその意見に賛同しました。

そして導かれた会議の結論。それは、救いは神様からの一方的な恵みのプレゼントであり、人間の行いは必要ないということでした。割礼をはじめとして、私たちが神様に受け入れていただくために何かを行わなければいけないとか、何かを付け足さなくてはならないということは、もうないのです。

私たちに残されているのは、それをプレゼン

トとして受け取ることだけです。そして神様を礼拝しながら、神様によって罪赦され、新しくされて行く自分自身を日々受け取りながら、神様がこの私を通して何をしてくださるのかに心躍らせながら、神様に自分自身をささげて生きていくのです。

割礼というと遠い出来事のように思えますが、様々な困難の中で、イエス様がしてくださったことや、今も生きて働いていてくださることが完全だとは思えなくなり、自分で救いを作り出そうとすることがあるのではないのでしょうか。自分自身の欠けを嘆き、自分に必要以上の重荷を強いたり、こうなったのはあの人のせいだと誰かを咎める気持ちで一杯になって、人に重荷を負わせようとしたり。最終的に救いを完成させてくださる神様に委ねて生きるよりは、目に見える今の自分サイズの救いを手にしたくなるのかもかもしれません。

イエス様は、今の困難から解放される人生を求めてご自分の元に来る人たちを追い返しはされませんでした。心にかけて、癒やしてくださいました。しかし同時に、私はあなた方が期待するような神ではないともおっしゃいました。それらから今、解放されることよりも、最終的に完全な救いを完成させて下さるイエス様に目を向けて、人生の全てをお委ねして生き、死んでよい。それが、ご自身が成し遂げてくださった救いだからです。

私たちそれぞれに、人生の途上で苦しみや悩みを経験します。救いをプレゼントとして受け取ってはいても、まだその完成は手にしていないからです。その途上であるゆえに、なお罪に苦しみ、不条理と戦い、その中で心引き裂かれるようなことを負うこともあるでしょう。しかし私たちは、それらから逃げ出すようにして生きる必要はもうないのです。救いに必要なことは全て、すでにイエス様がして下さったから、そして人生のどの瞬間も、そのイエス様と無関係なことは何一つなくなったからです。

苦しみの中でも、最終的にはその苦しみをも呑み込み、私たちの悪をも善へと変え、全てのことを働かせて益として下さる。神様が私たちに差し出して下さった救いは、そんな恵みのプレゼントです。

(記 説教要約奉仕者)